

しろくなるというのは私の実感です。特に「十翼」の一つ「繫辞伝」はそうだと思います。

私、十年前から名古屋のNHK文化センターで月に二回、「易経」を教えています。十年かかってようやくひととおり学び終わるところなんです。

で、いまちょうど「繫辞伝」の最後をやっています。「繫辞伝」を読み進めていくと、たつた一行に一時半もかかったり、きょうはよく進んだと思う時でも三行しか説明できていかなかったりするんですが、でも「繫辞伝」には易のエッセンスが詰まっています。理解が深まっていくんですね。皆さん、「おもしろくて仕方がない」とおっしゃっています。私もまた受講生の方々に「繫辞伝」までちゃんと読んで勉強している人は少ないから、必ず力になりますよ」と励ましながらなんと十年やってきました。

伊與田 それだけ長く続けてこれらたことは感心ですね。

竹村 最初は皆さん、占いの講座と間違えて入ってこられる方も多かったです。占いを教えないものですから不思議そうな顔をする方もいらつしやいました。古典としての『易経』を読んで学ぶ講座だと分かるよ、「えっ、易

経」ってこんなにおもしろいの」と大変喜んでくださるんです。

伊與田 そういえば、かつて大阪に洗心洞という大塩平八郎の私塾がありました。明治時代に復元され古典の講義が行われていたのですが、戦争で建物が焼け、その後主任講師の先生も亡くなったものですから、つなぎに思つて僕が昭和三十年に始めたのが洗心講座です。この「洗心」という言葉が「易経」の「繫辞伝」に出てくる。

竹村 「聖人これをもつて心を洗ひ、退きて密に蔵れ」(易)よつて心を洗ひ清め、一歩退いて精密な天道に身を任

せる」という一節ですね。

伊與田 この洗心講座が五十二年間ずっと続いています。

竹村 五十二年間ですか。かなりの回数を重ねたのでしょうか？

伊與田 八月は休みみだから五百八十回くらいになります。

竹村 それは大変なことですよ。やはり学び続けることに大きな意義があるのです。

### 易に通暁し

#### 信望を集めた先人たち

伊與田 先ほども少し申し上げましたが、安岡先生に直接、易学講義を受けたことで僕の「易経」に対する眼が開いた気がします。昭和十七年ですから、ちょうど太平洋戦争が勃発した翌年です。戦争が長期にわたる中で「将来を見通す上で、易は欠かせない」と考えていた時に、一週間にわたる先生の講義があると聞いて、万難を排して東京の金鶏学院に向きました。直接先生を通して易を学んだことで、少なからずカルチャーショックのようなものを受けましたね。

竹村 それは伊與田先生がおいくつの時でしたか。

伊與田 二十六歳の時でした。竹村先生が易に出合ったのと同じくらいの

年齢です。

竹村 あ、そうですね。

伊與田 中江藤樹先生が「易経」に出合ったのも二十八歳の時でした。藤樹先生が近江聖人と呼ばれるのにはいろいろ理由があるでしょうけれども、片田舎にいなながら人情の機微や世の動きをじつと見つめておつたのは、やはり易学の知識があつたからだと思ふんです。あの易は独学でした。

竹村 独学だったらいいですね。

伊與田 藤樹先生はお母さんに孝行を尽くしたいという一念で脱藩までして近江に帰つてこられます。けれどもやはり「易経」を学びたいと京都に出て有名な先生を訪ねたら、月謝が高くて教えを受けることができなかつた。

次に別の先生のところに行つたら、月謝は要らないが「易の主要の講義が終わるまで絶対家に帰るな」と。孝行を尽くすために帰つてきたのに帰るなと言われても、残念ながらとどまることができな。そこで書を求めて独りで学ばれることになったんです。

弟子の熊沢蕃山も二十七歳で藤樹先生に映発されたのか「易経」を学びまして、岡山藩主の池田光政のもとで縦横無尽の働きをし、江戸に出ては大名までが札を篤くして教えを受けるよう

